

# 北海道師範塾 「教師の道」 塾頭通信

第810号 平成26年9月29日

## 保育所は迷惑施設？

騒音問題で、保育所の建設が難航というケースが各地で相次いでいますが、こうした状況が続くと、保育所の待機児童ゼロというのは絵に描いた餅も同然となりかねません。

昨年夏、さいたま市内で、児童90人を受け入れる保育所の建設計画が地域住民の反対で撤回されたそうですが、反対の理由が「静かな老後を過ごしたいと思って家を建てたのに」「送迎の車で住民が事故にあったらどうするのか」といったものだったそうです。

保育所がまるで迷惑施設のような扱いで、正直困惑します。子どもの声は良く響きますし、大勢集まれば確かにうるさいと感じる事は私にもありますが、それにしても反対の理由が「静かな老後を過ごしたい」というのでは、いささか寂しい気がします。

最近では、保育所や幼稚園では、窓を二重窓ガラスにしたり、防音壁を設置するといった騒音対策は当たり前といわれています。しかし、いくら騒音対策といっても、子ども達を園舎の中に押し込めて、子ども達の声が外に漏れないよう声を潜めて生活させる等という事はあり得ないし、そんな事が子どもたちの成長にとって良いはずもありません。

何より問題だと思う事は、地域の大人達が子ども達に対して、「子ども達は邪魔な存在と見ている」というメッセージを与えてしまっている事です。

「保育園の子ども達にはそんな事は分からないだろう」と思われるかも知れませんが、地域には保育園に通う子ども達ばかりではありません。小学校や中学校に通う児童生徒も、保育園を巡る大人達のやり取りを、耳をそばだてて聞いているはずで。

高校生等が公園等で大騒ぎし、地域の住民とトラブルを起こすというような話をしばしば耳にしますが、いくら子ども達の行為であっても、こうした迷惑行為は許されません。しかし、幼い子ども達が、公園ではしゃぎながら遊ぶ姿まで騒音と感じて排除しようとするのは行き過ぎだし、子どもの声を騒音としか感じられないというのでは、その貧困な感性を憂えます。

今日本の活力が失われつつあるように感じるのは、地域から子どもの声が消えかかろうとしているからではないかと、私には思えます。

私が子どもの頃は、子どもがうようよいて、学校から帰ると街中には子ども達が大きな声を出しながら走り回り、遊んでいたものです。当時でも、うるさいと感じていた人はいたと思いますが、地域の人達は多分、子どもというものはそういうものだ、半ば諦め、納得もしていたのではないかと想像しています。私にとっては、地域に子どもの声がかくしない事の方が、遙かにいびつで異常だと思います。

勿論、住民の中には、病気等の理由で子ども達の声がストレスの原因になるといったようなケースもあるでしょうから、子どもの声は受忍しろと一方的にいう事は出来ません。

その意味では、保育園側としても、地域住民の皆さんの事情にも出来る限り配慮する必要があります。一方、地域住民の側は、地域全体として子どもの健やかな成長を支援するという前提の下で、協力していく姿勢が求められると思います。

ドイツでは、2011年（平成23年）に「乳幼児・児童保育施設及び児童遊戯施設から発生する子どもの騒音への特権付与法」という法律が出来たそうです。

つまり、この法律は、子どもの発する音は騒音ではないという事を明記したのですが、ドイツでは当時、法律でそうした事を規定しなければならない程、子ども達の発する音が原因の損害賠償請求事案が多かったのだと思います。

我が国では、そこまでの動きはありませんが、子ども達を巡って保育所と地域住民が相争うというのは、誠に不幸だといわねばなりません。

自分の子育て時代を振り返れば、「子どもが泣いて周りの方に迷惑を掛けた事があった」という思い出をお持ちの方は少なくないはずです。また、これから親になる世代の人は、子どもが出来たら今度は自分がお世話になるかも知れないのです。そう考えれば、世の中は順繰りだという事です。

地域の皆さんには、地域全体で子ども達を守り育てるという意識を持って、子ども達にも、またその親に対しても、もう少しの寛容さを示して欲しいと願っています。（塾頭：吉田 洋一）